

健康・医療・介護・福祉ニュース

◆ 最新の健康・医療・介護・福祉などに関するニュースを集めて紹介します。

地域医療の 2

架け橋に

奈良医療センター

国立病院機構奈良医療センター神経内科では、「もの忘れ外来」を開設し、認知症の診断・治療にあたっています。誰しも年を取ればもの忘れはするものですが、認知症では年齢以上に記憶力が低下し、さらに「料理がうまく作れなくなった」「近所の道で迷った」などの判断力の低下による症状もみられ、日常生活に支障が出る状態になります。

厚生労働省の発表によると、2012年時点で日本全国の認知症の患者数は約460万人と推測され、これは65歳以上の約7人に1人が認知症である計算になります。高齢化社会が進展していることから、認知症の患者数は、今後ますます増加していくと考えられます。

「もの忘れ外来」を開設

国立病院機構奈良医療センター 松村 隆介
神経内科診療部長



松村 隆介
神経内科
診療部長
【略歴】平成元年、奈良県立医科大学卒業。同9年、同神経内科講師、米国ソーク研究所研究員。同22年から現職。

は、実は様々(さまざま)なものがありますが、その中で最も代表的なものが「アルツハイマー型認知症」です。脳の画像検査で、「海馬」と呼ばれる部位が縮むことが

運動や会話が予防に

特徴的です(写真参照)。海馬は、私たちが物事を記憶する際にとても重要な働きをする部位で、海馬の神経細胞が病気で減少することによって、記憶力が低下するのです。

また、脳は1000億個以上の神経細胞からなりますが、神経細胞がお互いにつながりあい、ネットワークを形成することで、高度な脳の働きができると考えられています。アルツハイマー型認知症では、神経細胞のつながり具

合にも問題が起きることが知られています。

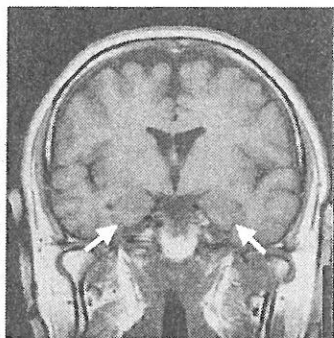
では、アルツハイマー型認知症の、治療の現状はどうなっているのでしょうか。現在では、4種類の薬が使えるよう

合を改善することで、病状の進行を遅らせることができます。また、認知症の治療を考えると、「病気になる前に病気を進行させない」といった予防の観点も重要です。

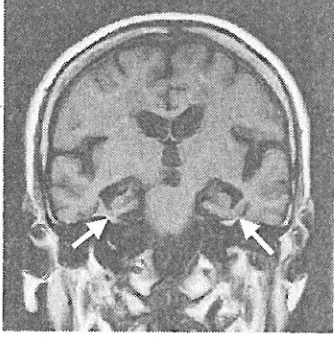
高血圧や糖尿病といった生活習慣病を放置すると、認知症になりやすくなるのが分かっています。高血圧や糖尿病は脳の血管の動脈硬化を引き起こし、その結果、脳の血

流が低下して脳の働きが悪くなることも、脳神経細胞のつながり具

正常



アルツハイマー型認知症



脳MRI検査にて、脳の断面を見たところ。白矢印の先に、「海馬」と呼ばれる部位がある。正常と比べ、アルツハイマー型認知症では海馬が縮み、隙間が広がっているのが分かる。

す。従って、高血圧や糖尿病の治療も大切になるのです。その他にも、脳を活性化することも重要な目標とを目標に、普段の生活を見直す必要があらわれます。「散歩など屋外での運動を定期的に行う」、「他人とおしゃべりをする機会を積極的に持つようにする」などが、脳の活性化には大切で

認知症をきたす病気は、アルツハイマー型認知症の他にも、「レビー小体型認知症」、「正常圧水頭症」など様々なものがあり、それぞれで治療法が異なります。正確な診断と治療のためにも、「もの忘れ外来」を受診していただければと思います。

次回(6月8日)付掲載予定

独立行政法人
国立病院機構奈良医療センター
星田 徹院長
電話0742 (45) 4591